

障害者スポーツにおける指導者養成の課題：統括団体と現場指導者への面接調査から

Problems for training leaders of sports with disabilities

1K04B117

杉 渕 敦

指導教員

主査 作野誠一先生

副査 木村和彦先生

【緒言】

年々、増え続けている障害者・障害児の数。国民の障害者への意識が高まってきている中で、本研究において特に注目したいのが、車椅子バスケットボールやブラインドサッカーなど、最近、新聞やテレビで見る機会が多くなってきた「障害者スポーツ」である。障害者がスポーツを実施する目的は様々であり、リハビリテーション、健康促進、体力維持・増進からパラリンピックのような競技スポーツとしての競技力向上まで、その目的に応じた指導を行わなければならない。つまり、幅広い知識を持った指導者が必要となってくるのである。(財)日本障害者スポーツ協会によると、同協会公認の障害者スポーツ指導者登録者数は2008年10月の時点で22,142人であり、資格制度が発足した1985年時の登録者数348人と比較すると約64倍にもあたる。また、現在の登録者数中で初級指導員が占める割合は約87%にも及ぶことから、障害者スポーツ指導者の人数が増加している反面、指導者の養成、指導者のレベルアップが追い付いていない可能性があることが分かる。

本研究では、統括団体である協会側と現場側の指導者養成に対する意向に食い違いがあるという研究課題(作業仮説)を設定し、両者への面接調査を行い、管理側と現場指導者側からの情報をもとにこの研究課題について論究を深めることを目的とする。

【研究方法】

本研究においては、(財)日本障害者スポーツ協会職員1名、協会公認の障害者スポーツ指導

員資格を持っており、現在指導活動を行っている指導者2名、を対象として調査的面接法を行い、それをもとに障害者スポーツ指導者養成の課題を具体的に探る。面接調査では主に「現在、過去の経験」「障害者スポーツ」「障害者スポーツ指導者」「指導者養成講習会」「指導者制度」の5点について質問を行い、面接者が必要だと判断した場合は、回答についての追加質問や質問についての補足などを求め、自由回答によるデータを収集した。

【結果と考察】

(財)日本障害者スポーツ協会指導部1名、現場指導者2名の計3名の回答を比較した結果、統括団体である協会側と現場指導者側で?ストレス、?障害者スポーツ指導者全体での満足な点、?金銭的な課題、?リハビリテーション、競技、生涯における指導者の役割、?指導者養成講習会への参加動機、?講習会で不満足な点、以上6項目に認識のズレが生じていることが分かった。また、面接調査を行った際、A氏(現場指導者)、B氏(現場指導者)、C氏(協会指導部職員)と順にインタビューを行ったことにより、A氏・B氏から出た意見について、C氏がどう捉えているかを調査することができた。そのインタビュー調査を考察した結果、?情報の少なさ、?海外の障害者スポーツ事情との比較という2点について、協会側と現場指導者側で差異が生じていることが分かった。

【まとめ】

統括団体側と現場側の指導者養成に対する

意向に食い違いがあるという研究課題（作業仮説）を設定したが、両者への面接調査を行った結果、特に差異があると認識されたのは「リハビリテーション、競技、生涯においての指導者の役割」「講習会で不満足な点」の2点であった。今回の調査で明らかになったのは、（財）日本障害者スポーツ協会と現場指導者で、障害者スポーツ指導者を取り巻く課題、問題において、意識統一が

されていない部分があるということである。急激なスピードで進化し続ける障害者スポーツに対応するには、統括団体である協会も、現場指導者もそれなりの対応を周期的に行わなければならない。そのために？リハビリスポーツに対応できる指導員の増加、？協会の意識改革、？指導員同士のネットワーク構築の3点が重要であると考ええる。